

## 高校生

## との対話

はじまり

私が相談係を担当していたときのことです。私の勤務する高校の相談室は静かな雰囲気、学習できるスペースや個別の面談室などがありました。

この相談室を中心に、私が出会った生徒たちとの対話を通して、さまざまな問題にどう対処したか、生徒たちがどのように変わっていったか、振り返りたいと思います。

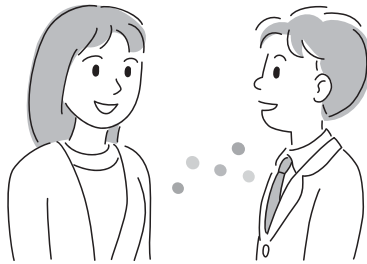
今回は、入学から卒業までの三年間、相談室を中心にしたAさんとのかわり

## Aさんの相談室登校から卒業までの3年間

元公立高等学校教諭(現非常勤講師)

木村 義子

きむら よしこ 人は、ちょっとした会話でうれしくなったり、悲しくなったり。「元気の出る言葉」を伝えられるように意識しながら実践しています。



を紹介します。

## 相談室を拠点に 〈1年生〉

Aさんは中学校のとき、相談室登校でした。原因は友人関係のトラブルだと聞いています。入試のときも別室で受験し

ました。「入学後も相談室を利用したい」との申し出がありました。

四月当初は順調でしたが、夏休み明けから教室に行かず、相談室に登校するようになりました。表情が暗く、朝のショートホームルームの時間が迫っても、机に突っ伏して動きません。私は、時計を見ながら声をかけ、担任の先生が相談室に迎えに来て、ようやく教室へ行くことができました。また、体育や苦手な授業に出席せず、相談室で過ごすことが多くなりました。

また、Aさんは、登校しても授業に出席していないことがある現状を、自分から母親に伝えることができないでいました。そこで、私は担任と連携し、Aさん・母親との懇談で、学校での様子を母親に伝えるとともに、進級や単位修得のルールを伝え、スクールカウンセラーの相談をすすめました。

次第に相談室を拠点とした生活が中心になっていきました。Aさんを教室まで送っていくのですが、教室の前に行くことがなくなってしまいます。また、「今日は早退

する」と決めると、周囲がどんなに説得しても自分の考えを通します。

やがてAさんは、「教室に入るのが怖い」「中学校のときのことを思い出してつらくなる」「高校は卒業したい」「心療内科を受診したい」などと話すようになりました。私は担任と連携して、懇談でAさんの気持ちを母親に伝えました。母親はAさんの思いを受け止め、心療内科への通院が始まりました。

三学期、相談室では自習や読書など、落ち着いて過ごせるようになりました。私は、話すことの苦手なAさんに、相談室でどんな活動をしたか、その日の記録を書いてもらうようにしました。また、週末に一週間を振り返り、次週の目標を立てるようにしました。

学期末は何とか授業に参加し、補充授業を受けて進級しました。

## 気持ちを表現する <二年生>



二年生になったAさんは、夏休み明けまでは相談室に来ることもなく過ごしま

した。夏休み明け、四時間目が終わると「相談室で昼食を食べたい」と申し出て、相談室に来るようになりました。

Aさんは「お弁当を食べているとき、友人と何を話しているかわからない」「文化祭の準備など、行事のときの過ごし方がわからない」と話しました。私は、Aさんの日頃の頑張り認めつつ、「無理に話さなくても、友人の会話に笑顔でうなずくだけよい」と伝え、昼休みの後半は図書室に行くなどして一人で過ごすことをすすめました。また、行事の前後の具体的な過ごし方についても話し合いました。

二学期の後半からは、放課後に相談室に来て、家庭の話をするようになりました。「お母さんは弟ばかり特別扱いする」「二方的に自分の気持ちを押しつけてくる



お母さんが大嫌い」「お父さんはいるのかいないのかわからない」「家をぶちこわしたい」などと、Aさんは激しく不満をぶつけます。家でも、母親や弟と口げんかをするなど、その行動も変わっていったようでした。時には「夜、家を抜け出した」などという会話もあったため、担任から家庭に連絡を入れると、母親はまったく気づいていなかったということもありました。Aさんが家庭で安心して過ごせるよう、担任と連携しつつAさんが主体となって家庭での約束を決めました。

約束は箇条書きにするなど視覚化し、守れたかどうかの確認にも使いました。その間、家庭との連携も密にとるようになっていきました。

三学期になると、家庭で不安定な状態が続き、欠席が増えたため、Aさんと母親の許可を得て心療内科と連携し、学校での対応について聞きました。主治医からは「精神的にゆとりのない状態で、必要であれば学校を休ませてよい。クラスメートにも本人の様子を伝え、不調の際には助けてもらえるとよい」と助言があ

りました。

助言を踏まえ、校内での連携をするとともに、Aさん・両親との懇談の場を設けました。これまでのAさんの努力や頑張りを、現状を伝えつつ、不安定なときは送り迎えをお願いし、進級・卒業に向けて学校・家庭が協力することを確認しました。

この懇談では、父親も非常に心配していることがAさんにも伝わったようです。しばらくしてAさんは登校できるようになり、進級しました。

### 進路を切り開く 〈三年生〉

三年生になると、相談室への来室はほとんどありませんでした。私は担任を通じて「何かあったら相談室に話しに来てよい」と学期に一回くらい生活を振り返ろう」と提案しました。高校には定期テストが四回ありましたので、主にテスト後にAさんを相談室に呼び、学校生活や家庭での様子について話し合いました。

Aさんは他の生徒と同様に、体調不良時は保健室を利用し、体調が戻らなければ

ば早退するようになりました。

進路選択では、文科系の大学に進みたいAさんと、資格を取れる大学に進ませたい母親とで意見が食い違いましたが、担任の先生にも応援してもらって、自分の気持ちを両親に伝え、志望する大学に進路を決めました。

卒業を目前とした懇談では、新しい生活への不安が強く見受けられましたので、卒業までの過ごし方を具体的に伝えました。また、大学入学後の新しい友人の見つけ方や、学生相談室などの利用も伝えました。

Aさんは、家庭学習期間も大学の下見をしたり、英語の勉強をしたりして充実した時間をもてたようです。迎えた卒業式の日、晴れやかな顔で相談室に挨拶に来てくれました。

### 三年間を振り返って

各学年末には、人間関係などに配慮してクラス分けを行い、教科担任会を開いてAさんへの配慮を依頼しました。

また、自分の状況をうまく伝えられないAさんの代わりに、懇談という場で保護者にAさんの学校での様子や思いを伝えてきました。特に父親の懇談参加によって「自分は両親にとって大切な存在なのだ」と理解でき、そのことがAさんの心の大きな支えになったように思います。

Aさんへの支援がうまくいった理由として、Aさんや母親が「高校を卒業したい」という強い意志をもっていただけが挙げられます。Aさんもよく頑張りましたが、母親もAさんを何とか学校へと送り出し、進級や卒業に惜しみなく協力してくれました。

そして、Aさんが相談室を拠点に自分の気持ちを言葉で表現し、感情や行動をコントロールする力を身につけたこと、約束や目標を具体的なものにすることによって見通しがもちやすくなったことなども、支援がうまくいった理由だと思います。

高校卒業が、これからのAさんの大きな自信につながることを、私は確信しています。